

福知山 小野小町ものがたり

福知山にある静かな村のものがたりです。
 十二月の風の余だいたい寒い夜、直助は布団の中で眠ろうとしていました。
 あると、静かな部屋の中に「トントン」「トントン」と誰かが戸を叩く音が響きました。
 おそろおそろ玄関の戸をあけると、活きたない小柄（こがら）な女が震えて体をふるふるど
 振るわせ下を向いて立っていました。
 「こんな夜遅くにどうしたの？」
 と聞くゆつくりと顔をあげ、かすかな声で
 「旅の途中の者です、泊まる所がなくて困っています。泊めていただけませんか？」と言
 いました。
 直助は、女の顔を見ると思わず、目をそらしてしまいました。
 女は病気になるているのか、顔は赤くひどく腫れ上がり、手も腫たく見いられたかた
 のです。
 直助は、このまま見て見ぬ振りは出来ないど、急いで家の中に入れてやり、たき火を手
 で暖かいお茶を飲ませてやりました。
 女は、目を赤くして涙をにじませ
 「ありがとうございます、ありがとうございます」
 と言いながらぐつぐつと眠りにつきました。
 その女の事は、あつといつ間に村全体に広がりました。
 村人は直助を呼び出して
 「汚い女を村から追い出せ！」
 「その病気が村に広がったらどうする！」と強く詰め寄りました。
 女がこの事を知ると悲しみ、あの弱っている体で旅を続けてしまつと
 直助は思ったので、村はずれの薬師堂（いさを祭る建物）に案内して、
 看病かまひよつすることになりました。ある日、食事を運びに行くと、女は祭られている薬
 師如来像に両手を合わせ、一日も早く病気が治りますようにと、とても上品な言葉遣いで、
 お祈りしていました。直助はその姿をみて、ただの旅人びなのだからと心の中で思いなが
 ら薬師堂を後にしました。
 その日の真夜中、女の枕元に、きらきらと輝く薬師如来様が笑顔で立られました。
 そして、東の方を指差し「湯の湧き出る池があります。その湯で七十七日間
 顔と体を洗い続けられ、必ず病気は治ります」と言われました。
 女は驚いて飛び起き、両手を合わせて周りを見渡しましたが、
 部屋の中は静かで何も変わった様子はなく、いつもと同じ薬師如来像がありました。
 女は昨日の夢の薬師如来様の教えを信じて、まだ薄暗い朝早くに東の方へ池を探して歩き
 始めました。
 そして、空がつつすらと明るくなってきた頃、やごと湯煙の上がる
 小さな池をみつけました。「この池だわ。昨日の夢は正夢だったのですね」
 と大変喜び涙を流しました。
 女は、この出来事を直助に話すと、
 「薬師如来様のおかげで病気が治るのではないですか？
 教えを信じて池に泳ぐべきです」と言われ、七十七日間、池に泳ぐことになりました。
 女は、毎日休むことなく笠で顔を隠し村はずれの池に泳ぎ顔と体を洗いました。
 直助の家族以外は、誰一人として声を掛けたりする村人はおらず、人目を避けて、一人て池に
 泳ぎ続けるのは、とても寂びしく苦しかったのでした。
 その寂しさを知らぬうちに
 女は近くの山に登って和歌を詠みました。

みひらけは 法のこゑする 正明寺
 物淋しきは 小野脇の里

この歌を直助に聞かせました。直助はこの歌を聞いて、本当にただの旅人ではないと思ったので名
 前を聞きました。しかし、女は言葉少なく
 「山陰から帰る途中のただの旅人です」
 としか答えませんでした。その頃、村に不思議な病気が流行りました。
 その病気は、高い熱が出て体にブツブツが出来るひどい病気でした。村の人々は、直助が看病して
 いる女の病気が
 うつり広がったのだと、直助をひどく責めました。
 村から、女を追い出すよう言われた直助は、とても悩む苦しみました。
 しかし、直助は勇気を出して、村人の前に行き、
 「わしの話を聞いてくれないか？今、村で流行っている病気は、あの女からうつったのではない。そ
 の証拠に、わしは毎日のように女に近づいているが病気になつてないではないか。あの女の鬱陶気
 と言葉遣いは、とても上品でただの旅人ではないと思う。あの汚く貧しくみえる女も、みんなと同
 じ人間だ。

